

研究ノート

効果的な道德教育のための指導方法についての研究 ～道德学習プログラムの実践をもとに～

A Study on The Teaching Method for Effective Moral Education
— Based on The Practice of The Learning Program on Moral Education —

新川 靖*¹

要約：平成 27 年の学習指導要領の一部改正による「特別の教科 道德」の新設は、「特別の」という言葉が付されるとはいえ、道德の教科化である。この改正は、いじめ問題に端を発しているが、教科化されるにいたる中で、従前の道德教育及び道德教育の実効性の弱さが指摘されている。本研究では、従前の道德教育についての課題を整理し、道德教育と道德授業をどのように改善すれば実効性が高まるのかを検討し実践へとつなげていくことを目的としている。

まず、資料の登場人物の心情を確認するだけの道德授業の課題、新たな方法として提案される問題解決的な道德授業等の課題、向上目標としての性質をもつ道德教育における評価の課題について整理を行った。

そして、それらの解決に向けて筆者が実践してきた道德学習プログラムについて考察した。道德教育における問題の質の向上、評価の視点と方法の確立という課題はあるものの、児童の実態に応じて重点化したテーマについて、道德授業を要として道德教育に関する様々な教育活動を関連させて学習を進めることは効果的であることには変わりがない。学習指導要領の目指すところと一致している。問題解決的な学習プログラムや単元的な学習を取り入れた道德教育の研究を進めていきたい。

Key Words：道德教育、道德科、道德学習プログラム、問題解決、評価

I 研究の目的

平成 27 年 3 月 27 日に小学校の学習指導要領が一部改正され「特別の教科 道德」が誕生することとなり、道德教育の充実が図られることとなった。だが、従前の学習指導要領においても道德教育は、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、全ての教科等においても、それぞれの特質に応じて適切な指導を行うものとされていた。要である道德の時間も「補充、深化、統合」をキーワードに道德的実践力を育成するものとされていた。これらをうけて各学校では、年間 35 時間（小学校第 1 学年においては 34 時間）の道德の時間と教育活動全体で行う道德教育を実施してきた。それにもかかわらず道德は領域から特別の教科となったのである。

これまで実施されてきた道德教育の課題を指摘する声は多く、道德教育の充実に関する懇談会の報告では、他教科に比べて軽んじられていることや道德の時間に何を学んだかが印象に残るものになっていないなどの「道德

教育全体の実情」、各教科等との関連付けされた指導が行われにくく実践的な行動力等の育成が軽視されがちな面があるなどの「道德教育のあり方」、授業に現実味がない、具体的に実践させたり振り返らせたりする指導が十分でないなどの「道德教育の具体的な指導方法」について、それぞれ課題が指摘されている。

道德が他の教科等に先行する形で、学習指導要領が改正され特別の教科となったのは、いじめ問題に端を発して、学校における道德教育の効果が問われたからである。改正された学習指導要領では、道德教育は、児童の道德性の育成という役割を果たすべく、従前と比べて、より効果的に行われることが求められている。そこで、この研究では、改正学習指導要領における効果的な道德教育の指導方法のあり方について再考していく。

II 道德授業の課題

「道德の時間」は、その機能が十分発揮されていない現状があると指摘されている。これまでの「道德の時間」は教科ではないため、指導要録や通知表等へ道德の時間の評価を記載されることがなかった。授業を実施する上

2016 年 1 月 6 日受付 / 2016 年 2 月 17 日受理

*¹ Yasushi SHINKAWA

関西福祉大学 発達教育学部

では、指導方法に不安を抱える教師が多い、学年が上がるにつれて、道徳の時間についての児童生徒の受け止めがよくない、児童生徒の発達段階を十分考慮せず、児童生徒に望ましいと思われるわかりきったことを言わせたり書かせたりするといった点も、学習指導要領の改正にもなっており指摘されている。

柳沼は、これまで実施されていた読み物資料の登場人物の心情を考えることを中心とする道徳授業について、「心情追求型の道徳授業」とし、「学習指導要領に記載された内容項目を計画的かつ発展的に指導し、子どもたちの道徳的心情を画一的に陶冶するところにある。そこでは、登場人物の心情（気持ち）を3つか4つほど問いかけるだけで授業が成り立つため、誰でも簡単に実践することができる点では、きわめて簡単かつ明瞭な指導法である。」⁽¹⁾と述べている。そして、この指導方法の課題は、登場人物の気持ちばかり尋ねること、行動の結果についての責任を考察しないこと、道徳的価値を実現するための適切な行為を主体的に選択し、実践することができる力は養えないことであるとしている。さらに、心情追求型の授業による指導は、道徳的心情と道徳的判断力と道徳的行為や道徳的習慣が切り離されており、知行不一致を容認していることを指摘している。つまり、これまでの道徳授業は、心情を問うことによって、授業者が作品に描かれた道徳的価値に児童生徒を導き、徳目を伝えるインカレーションであり、インドクトリネーションにつながりかねないとしている。

道徳授業を他教科の授業と比べてみる。他教科の授業では、児童は、本時の学習内容についての知識や技能、さらに思考の仕方などは身に付けておらず、学習を通して身に付けるという前提で授業が構成されることが多い。しかし、道徳授業では、すでに本時で扱う道徳的価値について児童生徒はこれまでの生活経験を通じた理解を持っている。例えば、勇気をもって正しいことをすることは大切であるという道徳的価値について、道徳授業で初めて出会い、理解するという児童はいない。道徳授業では、道徳的価値について書かれた資料をもとにして、一人一人が生活経験に応じて持っている「勇気をもって正しいことをすることが大切である理由」、「行動にうつすことの困難さや悩み」、さらには、「正しさや勇気」について考える活動を行う。この活動が道徳的価値の理解及び自己の生き方について考える活動である。しかし、友達と考えを交流したり、吟味したりする考える活動が十分になされず、読み物資料に描かれた登場人物の心情

を、場面のうつりかわりに応じて答えていくだけであれば、児童はこれまでに身に付けた道徳的価値を資料になぞらえて表現するだけで道徳授業を終えることになる。このような授業では、道徳的な問題についてテキストを使って個人で学習をしていくことも可能となり、学級という集団で学習に取り組む意義は薄れ、児童の高まりも集団の高まりも期待できない。柳沼が課題としているのはこういった授業のことであろう。だが、実際の学校現場において、心情を追求する授業が目指すものは、表面的な心情を確認するだけの授業ではない。主人公の行動の変容がえがかれた場面を中心として心情を追求し、なぜ、そのような変容が起こったのかを考えさせ、児童生徒の道徳的価値を高める授業も多数実践されている。そして、多くの指導方法の工夫や心情を追求するのにふさわしい資料の開発等が行われている。だが、そこまで至らずに柳沼の指摘するような授業が多く行われていることもまた事実であり、考える道徳科の授業づくりは大きな課題である。

Ⅲ 道徳授業における問題解決的な学習について

これまでの道徳授業の課題は前述の通りであるが、資料のあらすじを追うだけの形式化された授業展開が実施されてしまう原因の1つは、道徳の時間の目標にある。これまで示されていた「道徳実践力を育てる」という目標により、内面的資質を育てることを意識しすぎるがゆえに、道徳的行為や道徳的習慣を取り扱いながら目標に迫るといった多様な指導は行われることが少なかった。その結果、道徳の指導のあり方は他教科と比べて硬直化し、柔軟な指導を妨げ、資料を形式的に読み取るだけの授業につながっていったともいえる。

そこで、一部改正小学校学習指導要領の「第3章 特別の教科 道徳 第3 指導計画の作成と内容の取扱い」において、「(5) 児童の発達の段階や特性等を考慮し、指導のねらいに即して、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等を適切に取り入れるなど、指導方法を工夫すること。その際、それらの活動を通じて学んだ内容の意義などについて考えることができるようにすること。また、特別活動等における多様な実践活動や体験活動も道徳科の授業に生かすようにすること。」⁽²⁾と示されている。そこには、新たな方法の一つとして道徳教育における問題解決的な学習も加えられている。これから、道徳授業は、指導のねらいに即することには変わりはないが、学校や児童の実態に応じて多様な指導方法

を取り入れていくことが求められるのである。

道德授業の改善案として、柳沼は、これまでデュエイの構成主義や道德授業論に基づいて問題解決的な道德授業を紹介してきた。その著書では、道德資料「手品師」をもちいた問題解決的な道德授業の授業展開案を示している。その案では、手品師はどのように行動すれば、夢の実現につながる大劇場の出演と、男の子との約束の両方を大切にすることができるかを児童に考えさせようとしている。この展開であれば、多くの児童は、男の子に連絡がつくようにして劇場に行くということを考える。そして、学級での話し合いでは、男の子への連絡をするための具体的な方法へと議論は向かい、誰が男の子に言うのか、どのように言うのかといったスキルについて考えることになるであろう。この学習では行動の方法に目が向き、誠実や思いやりといった判断するための根拠となる道德的価値について話し合うことは十分でなく、道德的価値への十分な自覚がないまま、行動の方法についての吟味がされる可能性が高い。このように、1時間の道德授業において、問題を解決する授業を実施することを想定した場合の最も大きな課題は、行動の方法についての話し合いが中心となる可能性が高いということである。道德的価値の自覚及び自己の生き方を考える道德授業において、話し合わせたいのは「どのように行動すべきか」ということではなく、「どのような考えに基づいて主人公はその行動をするのか」ということである。

また、問題解決的な道德授業において、「この時、主人公はどうしたらよいだろう」「自分ならどうするだろう」という発問が主体的に学習を進めることへとつながるとしている。しかし、「主体的である」とは、自らが課題を自分事として学習に取り組むことであり、「自分ならどうするか」という問題を考えればすぐに、主体的であるといえるわけではない。

さらに、柳沼自身も指摘するように、この授業も繰り返されればパターン化し、児童は問題を効率的に処理していくことにもなりかねない。

問題解決するための問題そのものについての吟味も必要となる。道德教育における問題とは解があるものなのか、オープンエンドで終わるものなのか。そもそも1時間で解決することができるものであるのか、または、1つの資料をもとにして考えれば解決することができるものなのかなど道德教育における問題のあり方についてさらに考えていく必要がある。

IV 道德の評価について

道德科となるにあたり、道德授業における評価のあり方が問われている。道德授業の指導方法の工夫・改善のためには、これまでの指導方法の見直しと新たな指導方法の可能性を探ることは不可欠である。道德科の授業が効果的であったかどうかは、ねらいに対して、児童や集団の道德的価値の自覚や自己の生き方についての考えがどのように変容したかを評価しなくてはならない。もし、1時間の道德授業の中で成果を見取ろうとするには、そのための評価規準、そして評価基準が設定されていく必要がある。

道德授業の評価を実施していくためには、本時のねらいが適切に設定されなくてはならない。道德の特質をもとに、目標やねらいを考えた場合、それは到達目標ではなく向上目標としての性質を持つ。到達目標が設定される学習では、子供がよく話し、書き、考えた授業であっても「目標に到達することができたかどうか」で判断され、到達していない授業は改善する必要があるとされる。そのため、この到達目標は1時間の授業での評価を行うことも可能である。しかし、道德科の性質を考えた場合、通常は単元が設定されない上に、目標は向上目標としての性質を持つため、評価を1時間で実施することは難しい。授業での児童の様子の把握だけでなく、例えば、授業前後の学習や生活の場面における言動の様子を比較して評価するなどの工夫をしていく必要があると考える。

V 小学校での道德学習プログラムの実践について

これまで述べた課題の解決に向けて、導入時に問題を設定し、複数の道德授業と体験活動や他の教科との関連を図りながらある程度の時間をかけて解決していく学習活動が効果的ではないかと考える。そこで、筆者がこれまでに道德学習プログラムとして実践してきた指導方法の例をもとにして考えていきたい。

1 実践の概要について

○学習プログラム名 「生き方・夢を見つけよう」

○期 間 6年生27名 平成18年9月上旬～11月下旬

○育てたい子供像

よりよく生きていくことの素晴らしさを感じ、力強く生きていこうとする子供

○児童の実態について

実践校では、前年度から文部科学省の指定事業を受けており、学年ごとに、命の尊さとよりよい生き方について

ての2つの学習プログラムを作成して実施をする取組をすすめていた。そのため本時例の実施時には、児童は、前半に命の尊さについての学習プログラムを受けており、それを受け継ぐ形となっていた。そのため、この学習プログラムは児童は命の尊さを感じ、自らも命あるものとして前向きに生きていなくてはという考えを持っているところからスタートした。これらをふまえて、本学習プログラムでは、自己の生き方を考え日々の生活を充実したものにしようとする態度を育てることをねらいとしている。

2 目指す姿に向けて設定した4つの段階とその実践例

道徳学習プログラムでは、道徳授業とそれ以外の教育活動とのつながりを重視している。そこで、指導者だけが学習活動のつながりを意識して指導をするのではなく、児童にも学習活動間のつながりを意識させて学習プログラムに取り組ませることにした。また、学習プログラムの初期の段階で、オリエンテーションを実施し、児童には、学習のテーマと問題意識をもつ場面を設定した。

さらに、道徳学習プログラムに関する学習活動のうち各教科等で実施することが適当でないが、ぜひとも実施したい体験活動等については「ライフタイム」として、学校の裁量の時間を使って特設して行うこととした。

この道徳学習プログラムでは、その学習の過程を「ふれる段階」「気づく段階」「深める段階」「創る段階」の4つの段階に分けて設定している。それぞれに、多様な学習を組み合わせる小単元のような役割をもたせている。指導者は、それぞれの段階のもつ役割を意識して指導に当たるようにしている。

(1) 「ふれる段階」

テーマとする内容に関わる道徳的価値について、学習や生活を通して道徳的価値にふれる段階である。この段階では、学習者自身は学習プログラムを学んでいることには気づいていない。一方、指導者は、これからの学習の準備段階として認識し、活動中の児童の様子を記録したり、意図的に声をかける等の指導をして児童に印象付けたりする。いわば学習テーマにつながる体験の蓄積の段階である。

実践例における「ふれる段階」の位置づけ

これまでに実施した道徳学習プログラムを想起し、「命のすばらしさ」をふり返ることができるような活動をする段階

表1 「ふれる段階」の実践事例

学習活動	活動内容・本学習プログラム上のねらい等
学級活動 「夏休みの生活と2学期に向けて」	夏休みの生活を振り返る共に、時間は過ぎていき戻ってこないこと、卒業に向けてこれからどう過ごすことが大切なのかを感じる。
道徳 「白神山地」	白神山地の自然の様子を通して命が自然の中で生かされていると感じ、自然を大切にしようとする心情を育てる。
言葉に関する 常時活動 「詩の暗唱」	谷川俊太郎「生きる」の詩を暗唱する。
体育 (保健学習)	「病気の予防(薬物乱用防止について)薬物のこわさを知り健康に生きることの大切さを感じる。

ここでは、1学期に学習した「命の尊さ」についての学習プログラムをふり返ることができる学習場面を設定している。この学習を行うことで、児童の中に学習したことを想起し、自らの大切な命をどう生きていくかという次の段階の学習への関心が高まっていった。

(2) 「気づく段階」

気づく段階は、学習のテーマを意識した児童にとっての学習プログラム開始となる段階である。ここでは、オリエンテーションを実施し、学習プログラムのテーマについて知り、児童に問題意識を持たせる。また、テーマに関する道徳的価値を認識(再認識)する活動を行い、これからの学習の見通しを持たせる。また、この段階からは、後述するライフタイムという特設の学習を設定し、教科等では補えない、学習プログラムのための体験活動をする時間や常時活動を設定し、より学習が効果的に進むようにする。

実践例における「気づく段階」の位置づけ

人は夢やめざす生き方を持つことで、よりよく生きようすることができることに気づく段階

表2 「気づく段階」の実践事例

学習活動	活動内容・本学習プログラム上のねらい等
ライフタイム 「人間だけがもっているもの」	全てのものは命をもち一生懸命生きているが、人間だけが夢を持って生き方を考えることができる動物であることを知り、そのすばらしさについて考える。

ライフタイム 「夢と命の言葉集め」 (常時活動)	自分で調べたり、家族にインタビューしたりしながら夢や命を語っている言葉を集めて紹介しあい、夢や命についてこれまで多くの人々が考えていることに気付かせる。また、家庭との連携をはかり、学習プログラムの内容についての理解を得る。
道徳 「命を伝える動物園」	命を展示するという園長の姿を通して、命の大切さについて考えたとともに命に対する感じ方や生き方を大切にしようとする心情を育てる。動物の姿を通して、人々に命の大切さを伝えるという園長先生の考え方や生き方を知り、多くの人の生き方を知りたいという学習プログラムへの意欲を高める。

ライフタイム「人間だけがもっているもの」では、動植物は命をつなぐことを本能として生きていくのに対し、人間は「こうなりたい、このように生きていきたい。」と考え、悩むが、それが人間のすばらしさであることについて話し合った。この学習の終末では、オリエンテーションとして、夢や生き方の大切さについて考えるという学習プログラムのねらいを伝え、道徳「命を伝える動物園」では、「いろいろな人たちの素敵な生き方を集めていこう！」という活動への意欲を持たせることができた。

(3) 「深める段階」

深める段階とは、これまでの学習を通して道徳的価値について自分が考えたことについて、「本当にそうなのだろうか?」「他の考え方はないだろうか」と問い直したり、多面的に考えたりする段階である。気づく段階で明らかになった学習テーマについて様々な学習活動を通して追究していく段階として設定している。

実践例における「深める段階」の位置づけ

多くの生き方を学び、多くの人によりよく生きようとしていると感じる段階

表3 「深める段階」の実践事例

学習活動	活動内容・本学習プログラム上のねらい等
ライフタイム 「素敵な生き方を集めよう！」(常時活動)	いろいろな人の生き方に触れ、すばらしい生き方とは何かを考えさせ、真似してみたいと思った人物の生き方についてワークシートに書いて集めていく活動につなげる。
道徳 「最後のピッチで」	いつも自分の精一杯を尽くそうと考えるサッカー選手の姿を通して、どんな状況にあっても自分の考えに常に誠実に取り組もうとする心情を育てる。

道徳 「人生はフルコース」	前向きに新しいことに挑戦しようとする村上信夫シェフの姿を通して、常に前向きに新しいものに挑戦しようとする心情を育てる。
道徳 「天からのおそなえ」	三谷喜四男医師の生き方を通して、常に他人の身になって考え誰に対しても温かい心で接しようとする心情を育てる。
道徳 「夏祭り」	地域のために貢献している登場人物の姿を通して、私たちの生活をささえてくれる人々の存在によって成り立っていることを理解し感謝する態度を養う。
「あこがれの生き方」(家庭との連携)	保護者のあこがれの人物や生き方を聞いてワークシートにまとめる。
ライフタイム 「友だちのいいとこみつけ」	今の自分の生き方のよさを見直させるために、互いのよさをミニレターにして交流する。

この段階では、ライフタイム「素敵なき生き方を集めよう！」を通して、自分がすばらしい、真似してみたいと思った人たちの生き方を集めてくる活動が中心となった。道徳の時間では、その数人の生き方を取り上げた資料を選んだり、自作したりして授業を行った。

道徳の時間の後には、授業で取り上げた人物についてライフタイムと同じワークシートを用いてまとめる活動を行った。このことにより、道徳の時間は「生き方を集める活動」の1つとしての側面を持つようになった。

また、サッカー選手、料理人、医師といった有名な人物だけでなく、いつもお世話になっている地域の方を題材とした資料を作成し、授業ではゲストに迎えて道徳の授業を実施した。身近にもすばらしい生き方をしている人がたくさんいるということを児童に気がつかせるための活動であった。さらに、ライフタイム「友だちのいいとこみつけ」では、友だちから改めて良さを伝えてもらうことで「自らの生き方のよさ」について考えることができた。

ライフタイムの活動が中心となって様々な活動をつなげることができる活動ができた段階であった。

(4) 「創る段階」

創る段階とは、これまで深めてきた学習内容をもとに、児童一人一人がテーマについて考えたことへの実践意欲や態度を育てる持つ段階である。オリエンテーションで持ったテーマについての問題の自分なりの答えを創り出す段階であるともいえる。その自分なりの答えをもった児童が、学習プログラムの「育てたい子供像」に直結するのである。

実践例における「創る段階」の位置づけ

学んだことをもとに、自分の生き方について考え、今、めざしていきたい夢・生き方を考えていく段階

表4 「創る段階」の実践事例

学習活動	活動内容・本学習プログラム上のねらい等
ライフタイム「自分の生き方を考えていこう」	①3つの観点「がんばったらできること」「すこしががんばったらできること」「がんばらなくてもできるようになったこと」の具体的項目を設定し、毎日チェックした。 ②これまでの学習プログラムの振り返りをして目指したい自分の生き方と夢を考える。

この実践は、卒業の前に6年間のまとめとして自分の夢や生き方をまとめることを予告して終わりとしている。卒業式では、どの子もめざす夢や生き方について、全校の前で発表することができた。

この実践を通し、日記において「いろいろな生き方を自分の生き方の参考にしたり生き方のよさを見つけようとしたりする」という趣旨の記述や「当たり前のことを当たり前にやっていくことが大切である」という趣旨の記述をする児童が7割をこえるようになっていた。また、自分がなりたい人物像を25名、将来の夢を24名がもっていると回答している。

※本実践例は平成18年に筆者自身が実践したものである。この実践については、「〈活用〉の力とは何か－新しい学習指導要領の理念と実践－」金子書房にくわしく掲載している。また、資料として図1に本実践の道德学習プログラム構想図を掲載している。これは、勤務校の研究紀要の別冊学習指導案集に掲載したものに、実際の活動をふまえて加筆・修正したものである。

VI 道德教育の実効性を生む道德学習プログラムの特徴

筆者がこれまでに実践した学習プログラムの特徴を表5にまとめた。

表5 道德学習プログラムの特徴

特徴	具体的取組
①目指す姿に向けた段階の設定と諸活動の関連づけ	・4つの段階の役割を意識し、道德の時間とその他の教育活動を関連付ける。 ・学習活動の関連が視覚的に分かるようにプログラム構想図を作成する。(資料 図1) ・ライフタイムとして、児童に体験させたい活動ができる時間を特設する。

②道德授業の工夫	・自作資料を使用したり、テーマに合わせた資料を選択したりする。 ・導入、展開後段、終末において、他の活動を想起させたり、関連付けたりする工夫をする。
③ポートフォリオ、学級掲示の利用	・道德ノートに、学習プログラムに関する道德授業やライフタイム、体験活動等のワークシートや日記(コピー)、アンケートなどを貼付させ、ふりかえることができるようにする。 ・学級の側面に、学習プログラムに関する授業の内容やその時に出された意見などをまとめたものを掲示する
④児童の変容を評価するための取組	・変容をどのように見取るために、段階ごとに児童の様子をワークシート等から記録したものの、日常生活の行動の記録したもの、児童アンケート、保護者アンケートをもとに総合的に個人の評価を行う。

これらの特徴をもとに、工夫を進めることでⅡからⅣで述べた道德教育の課題は解決できるのではないかと考える。

道德学習プログラムは、道德授業だけでは成立しない。学校の教育活動全体と道德授業を関連させてこそ、学習プログラムとして成立する。そのことにより、道德授業が果たす役割、学校の教育活動全体で行う道德教育の役割をはっきりとさせて指導をすることができる。これは、いわば道德的判断力、心情、実践意欲及び態度と道德的実践の場の結びつきが強くなるということである。

また、オリエンテーションを行い、テーマについての問題意識を児童に持たせることは、道德教育における問題解決的な学習のあり方の1つだと考える。実践例では、「自分はどのような夢をもち、どのような生き方をしたいか」という問題を児童に示した。1時間の中で解決するのではなく、学習プログラムというある程度の期間の中で、道德的な問題について、多様な学習や生活の場面を通して考えることによって、児童は答えを出すことができる。答えが1つとは限らない道德的な問題を解決するような学習においては、1時間の道德授業で1つの資料を使って問題を解決する学習方法に比べて適切である場合が多い。

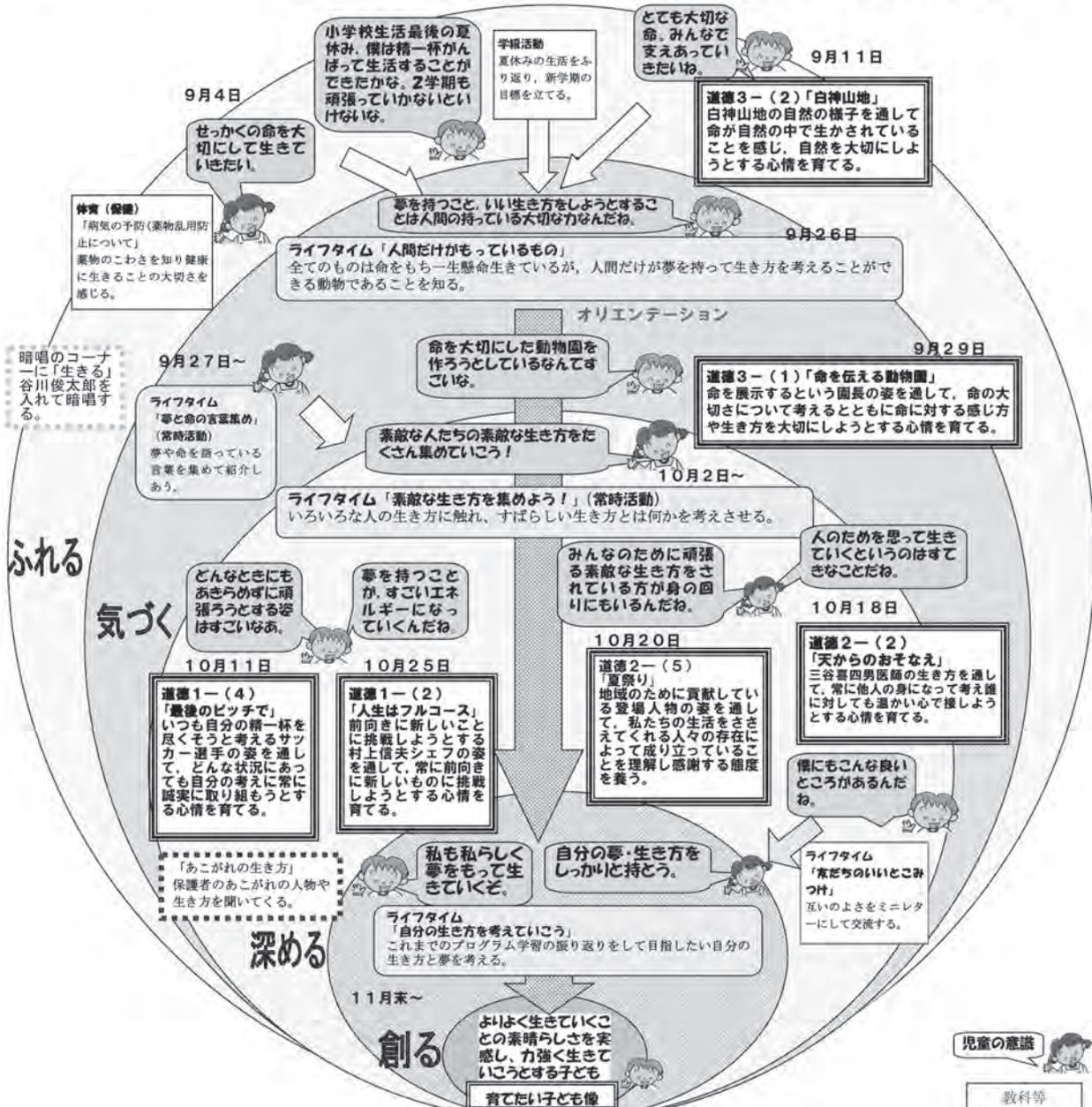
道德授業とその他の活動が連携することで、児童の変容が把握しやすくなり、授業の効果も見えやすくなる。このことにより道德教育や道德授業の評価を1時間で完結させるのではなく、ある程度の期間という幅を持って実施することができるようになる。授業前後の児童の姿を比較しやすくなるため、道德授業の善し悪しも評価しやすくなり、道德授業の質の向上に資するものである。

道德授業の改善の面では、学習プログラムによって

図1 道徳学習プログラム構想図

7 プログラム構想図

生き方・夢を見つけない



学習後の子どもの姿

学校生活で	地域・家庭で
<ul style="list-style-type: none"> ○ 日記の中に夢についての記述をする。 ○ 日記の中に生き方について考える記述をする。 ○ 自分の夢を具体的に持つことができる。 ○ どんな人間になりたいか明確に持つことができる。 ○ あこがれの人物を持つことができる。 ○ 自分の仕事(宿題、学習発表会の練習)などについていぬいにする。 ○ よりよい生き方を実行する。 (早寝早起き・整理整頓・あいさつ) 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家族と夢について話をする。 ○ 家族と将来の進路について話をする。 ○ あこがれの人物について家族と話をする。 ○ 夢に向かって生活の態度を変えていこうとする。

児童の意識

- 教科等
- 道徳
- 家庭との連携
- 日常の指導

テーマについての問題意識をもった児童が道徳授業を受けるため、道徳授業は児童の問題解決に資するためのさらなる工夫を求められることとなる。主人公の心情を表面的に確認していだけの授業では、問題意識を持った児童の満足やねらいに向けての変容は得られない。加えて「この時どのように行動すべきか」「主人公はどうすべきか」といった行動の仕方を考えるだけの、道徳科の特質をふまえない授業についても淘汰されるであろう。さらに、学習プログラムの中にソーシャルスキルや体験活動などの必要な活動の時間を道徳授業以外の時間を確保して位置づけることでより、それぞれの役割や特質を明らかにした学習活動が展開されることが期待できる。

Ⅶ 実効性のある道徳教育に向けての課題と今後に向けて
道徳学習プログラムの可能性について述べてきたが、研究を進めるべき課題を認識している。

まず、道徳的な問題のあり方についてである。道徳授業に限らず問題解決的な学習を進める上では、問題を児童が見出した、ぜひとも解決したいという必然性をもったものであることが重要である。今回紹介した実践例においては、オリエンテーションの中で、問題意識を持たせ、「いろいろな人たちの素敵な生き方を集めていこう！」と示している。ここで示したものは活動の目標にとどまっておき、児童が解決していこうとする問題までには至っていない。道徳教育における問題解決にふさわしい問題とは何かを明らかにして取組を進める必要がある。

さらに、評価についても課題がある。ある程度の期間があることで評価をする場面は増えるが、何をどのように判断するのか。また、向上目標であることから児童個々の実態の把握が必要となってくる。今回紹介した実践では、十分に評価を行うことができなかったが、この実践例の前に実施した学習プログラムでは、日々の行動やワークシートなどの記述の記録をすることと、アンケートなどで集めた資料を整理すること、さらにそれらを総合的に判断することに多くの時間を費やすこととなった。道徳教育充実のためには、どの教室においても実施可能であることが求められる。学習プログラムにおいて、どのような観点、方法で児童の変容を評価していくのかも、今後、研究を進めていく必要がある。

しかし、ここに挙げたように様々な課題はあるものの、児童の実態に応じて重点化すべき道徳的価値をもとにし

てテーマを設定し、道徳授業を要として道徳教育に関する様々な教育活動を関連させて学習を進めることは効果的であることには変わりがなく、これは改正された学習指導要領の目指すところとも一致している。今後も道徳学習プログラムの取組を礎とし、小学校の現場と連携して研究を行っていきたい。

引用文献

- (1) 柳沼良太『「生きる力」を育む道徳教育 デューイ教育思想の継承と発展』、慶応義塾大学出版、2012年、101頁
- (2) 文部科学省 平成27年3月27日告示『一部改正 小学校学習指導要領』、2015年

註

道徳資料「手品師」(出典 道徳の指導資料とその利用1 文部省)のあらすじ

腕がよいのに売れない手品師がいた。この手品師は大劇場立つことを夢見ている。ある日、その手品師が公園でさみしい思いをしている小さな男の子と出会う。その子を元気づけるために手品をすると子どもはとても喜び、手品師は次の日も公園で手品を見せる約束をする。その日の晩、友人から大劇場に出演予定であった手品師が急となったため代役として出演しないかという誘いがあった。この機会を逃したらもう二度と大劇場には立てないかもしれないと思いながらも大切な約束があると手品師はきっぱりと断る。次の日、手品師は男の子との約束を果たして公園で手品を演じた。

参考文献

- ・北広島町立本地小学校『研究紀要 本地小学校の道徳教育』、2006年
- ・柳沼良太『実効性のある道徳教育 日米比較からみえてくるもの』、教育出版、2015年
- ・梶田叡一他『〈活用〉の力とは何か－新しい学習指導要領の理念と実践－』、金子書房、2009年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』、2008年
- ・文部科学省『一部改正 小学校学習指導要領』、2015年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説 道徳編』、2015年
- ・中央教育審議会『道徳に係る教育課程の改善等について(答申)』、2014年
- ・道徳教育の充実に関する懇談会『今後の道徳教育の改善・充実方策について(報告)～新しい時代を、人としてより良く

生きる力を育てるために～』, 2013年

・梶田叡一他『現代教育評価事典』, 金子書房, 1980年